

# 唯物論の神は イスラームグッズを祝福し給う

## 世界の工場 中国の経験を垣間見る

松本 ますみ

室蘭工業大学

私の報告は、先のお2人のような、かっちりとした文化人類学的な研究ではありません。漢語で言う「走馬看花」——馬に乗って花を見るという感じで、実際に見てきたこととネット上で見えていることを総合してお話したいと思います。

### 中国共産党と宗教とのこじれた関係

旧社会主義圏の研究をしている方であればみなさんよくご存じだと思いますが、ソビエト連邦は無神論でした。社会主義政権は神を信じることが推奨されないことになっています。ソ連崩壊後、旧ソ連の国々はそれに対してさまざまな宗教復興策を練っていることも、みなさんご存じかと思います。

中国は1949年の革命以来、無神論が国是の、唯物論の国家です。憲法の前文には「国の根本的任務は、中国の特色を有する社会主義という道に沿って、力を集中して社会主義現代化の建設をする事にある」とあって、社会主義に「中国の特色」があるという冠詞が付いています。さらに、「中国の各人民は、中国共産党の指導の下に、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論及び三つの代表の重要思想に導かれ、人民民主主義独裁を堅持し、社会主義の道を堅持し、改革開放を堅持する」とあります。これはつまり三権分立がないということです。私たち自由主義陣営の人たちは「三権分立は当たり前ですね」と思いますがそうではなく、この司法、行政、立法という三権はすべて中国共産党の下にあるわけです。また、「人民の敵には権利がない」という法理論があるので、「天賦人権論」は認められません。ここが肝です。

### 無制限の信教の自由がない中国

したがって、無制限の信教の自由はございません。もともと「宗教はアヘンである」というマルクスとエンゲルスの考え方がありますので、潜在的に危険な勢力であるとして監視下に置かれ、中国共産党の指

導の下に置かれてきたことになります。

指導者によってかなり違いますが、たとえば毛沢東時代の1958年から数年間と、1966年から10年続いた文化大革命、このころには厳しい「弾圧」と言ってもいいような対応がありました。改革開放以降は、規制がないわけではありませんが、ゆるやかになってきました。ところが2015年から「宗教中国化」という方針が発動され、再び厳しい政策の下に置かれていることは、頭の隅に置いていただければと思います。

なぜ中国共産党はこれほどキリスト教、イスラームなど宗教が嫌いなのか。その理由の一つに、国共内戦の相手である国民党が、キリスト教、とくにアメリカのプロテスタントとの強い結びつきがあったことが挙げられます。これに対する報復措置として、キリスト教の宣教師が全員国外退去になりました。そして中国人だけの三自愛国教会がつくられたという経緯もあります。

第二に、世界史を勉強するとわかりますが、中国の政権が倒れるときには、多くの場合が宗教と結びついています。ですから、宗教の大きな動員力に恐れをなしているということもよく指摘されています。第三に、進化論のような考え方が強く、「無神論は科学的で進歩的で文明的である。宗教はアヘンで迷信に近く、愚昧で消滅すべき」という体制派知識人がいて、「宗教は消滅すべきだ」という政府の路線が学問的に正当化されていると言えるかと思います。

特にひどかったのがチベット動乱に連動した1958年の「宗教制度的民主改革」と、悪名高い文化大革命です。このときは「宗教は階級問題」と言われ、階級敵の消滅を目指しました。多くの宗教勢力、特に宗教指導者が階級敵として粛清されていきました。その正確な数はまだ統計がありません。現在の習近平政権もその考え方を原理主義的に継承していると言ってもよいかと思います。

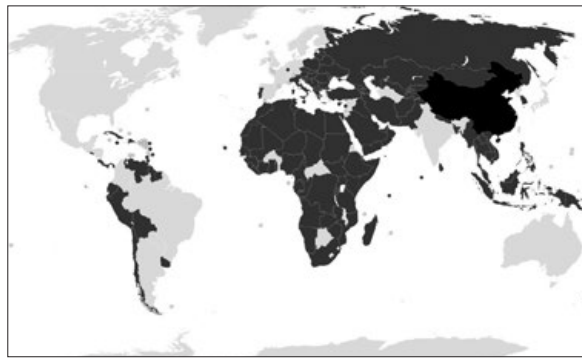
## チベット、新疆ウイグル、モンゴルでの弾圧

宗教は中国の民族問題と絡んでいるとともに、人権問題とも絡んでいることを、みなさん常識的にご存じだと思います。たとえばクリントン政権のときには、チベットの人権問題に対する批判が出ました。そのときは中国側が「米国政権の内政干渉だ。体制転覆の陰謀である」と主張して、両国の関係がぎくしゃくしたことも記憶に新しいかと思います。習近平政権ができて2年後からは「宗教中国化」が始まり、現在に至るまで続いています。

なぜ習近平がそんなことをするのかを調べてみますと、いま言ったことに加えて、自由、平等、民主、人権という西欧思想——普遍的価値とよく言いますが、こういうものが大嫌いなので、それに対して排斥する態度をいつも取っていると云えます。そしてもう少しややこしいのが、宗教を信じる人の多いムスリムやチベット仏教の信者である少数民族は、全人口の8パーセントしかいないのに、民族区域自治の面積は64.3パーセントと中国の大きな面積を占めるということです。少数民族がある宗教を信じてある地域に集まって住んでいることで、中国共産党にとっては都合の悪いことが起き得ると考えていると云えます。

チベットにおいては、ダライ・ラマ14世の亡命、チベット騒乱、ダライラマのノーベル平和賞、その後現在に至るまで抗議の焼身自殺が起こっている状況で、宗教が厳しく締め付けられています。また、新疆ウイグル自治区の問題は、ここ数年メディアでとり上げられ、国際問題にまで進展しています。もともと「新疆」は「新しい土地」という意味ですので、あまり中国文化が入ってこなかったところですが、本格的に「中国化」したのは、やはり改革開放後と言えるかと思えます。漢族と人口の割合が逆転し、先住民族のウイグル人はいい仕事がもらえない、あるいは差別をされ、結果的にウルムチ駅事件、昆明駅事件などが発生しました。そしてこれに対する対抗措置だと私は考えていますが、現在にまで続くコンセントレーション・キャンプの問題が、2017年ごろから起こっていると報道されています。つい数日前(2021年2月2日)には、コンセントレーション・キャンプで女性たちが夜な夜なレイプをされているというショッキングなBBCのレポートもありました。

内モンゴル問題も記憶に新しいところです。2020年9月の新学期からモンゴル語の教育が禁止になり、すべて漢語にしてしまったという多文化主義を大事



資料3-1 一帯一路に参加の国

出典: Green Belt and Road Initiative Center  
(<https://green-bri.org>) から筆者作成

にする世界の動きとは逆行するようなことが起こっています。

## 改革開放=対外開放から一帯一路へ

中国の改革開放は1979年から始まり、対外開放が始まりました。もう10年も前ですが日本のGDPを超えて、現在では3倍になっています。そのなかで、一帯一路(Belt and Road Initiative)が2013年に発動されました。これまでは世界の工場として輸出志向型の産業を維持して成長してきましたが、逆に内需充実へシフトしてきました。そして、現在は義烏からマドリッド、ミラノ、ロンドンへ鉄路コンテナがどんどん走っています。これは新疆ウイグル自治区を通っていきますので、中央アジア諸国も——嫌な言葉ですが——中国側としては手なずけておく必要があるというルートでもあります。

それから中国側のいろいろな戦略本を読んでみますと、サプライチェーンが世界中にあります。それで世界で圧倒的優位に立ちたいようです。これまで部品だけを作ったり、自国ブランドがあまりブランド力がなかったりしたわけですが、これからはハイエンド製品を作っていく。5Gやファーウェイが思い浮かぶと思いますが、収益型のITに関しては、世界最先端を売っていきたいというのが中国の方針です。

そして、製品(ハード)の輸出はOKで、たとえば今日取り上げるイスラームグッズに関しては出すのはOKですが、思想、ものの考え方の輸入はだめです。民主の考え方、自由の考え方もだめです。特に宗教関連はもっとだめだということです。

資料3-1で濃いグレーに塗っているのが一帯一路に参加している国々です。世界の面積の半分以上をカバーしていることがおわかりかと思います。



資料3-2 義烏の位置とマドリッドまでのルート

出典: [http://www.xinhuanet.com/english/2020-07/07c\\_139195088.htm](http://www.xinhuanet.com/english/2020-07/07c_139195088.htm)から筆者作成



資料3-3 メイド・イン・チャイナの品々

筆者撮影

### 回族の創業家の存在と義烏という創業家精神のまち——2000年代

私は義烏に3回ほど調査に行きました。約10年前なので、現在ではかなり変わったかと思いますが、本日の発表に向けていろいろイスラームグッズを買ってみました。みな義烏から来ていましたので、まだ義烏がイスラームグッズの集積地であることは変わらないだろうということをお話をしていきます。

義烏は中国の沿海部ですが、海には面しておらず、内陸港と呼ばれています(資料3-2)。2019年から、この義烏からマドリッドまでの大陸横断鉄道が動くようになりました。約18日間かけて、大量のコンテナ荷物がヨーロッパに向けて運ばれます。

2020年7月の段階で、半年間でマドリッドまで1万1,220コンテナが運ばれました。さまざまなインターネットの記事を見ながら、これはコロナに打ち勝つグリーンラインではないかと考えていました。特に注目すべきなのが、中国郵政の専用ラインができています。この発表に合わせてアリババでグッズを購入してみました。すべて中国郵政で届きました。ということは、これはアリババ路線とも言えるのかなと思います。

興味のある方は、AliExpressというアプリをダウ

ンロードして見ていただきたいのですが、配送に何日かかるかが出ています。日本は近いので発注から3週間未満で来ます。ワルシャワまでは鉄道12日、ハンブルグまでは15日ですので、陸路ですと前後の通関を入れても30日かからず、さまざまなものが中国から世界の消費者のもとに届けられていることがわかります。費用的にも、現在は船便の2倍ぐらいですが、航空便の半額です。海路に比べると時間は半分ぐらいの縮小になるという、いいことづくめの陸路の鉄道です。

義烏は日本の方にはあまりなじみがない場所かもしれませんが、マーケティング関係の方には知られた場所です。私が訪れた当時の義烏は「100円ショップのふるさと」と呼ばれていました。お店で買い物をするとついてくるショップバッグを作っている工場。日本向けの製品を見て、帰国してから実際に日本の某100円ショップで同じものを見つけて驚いたことがありました。

見ればわかると思いますが義烏は内陸です。陸路の鉄道ができる前は、寧波に集めて、コンテナに詰めて海外に出荷していましたが、現在は大陸の中であれば鉄道で行くという時代になっています。

資料3-3はみなMade in Chinaで、2007年に行ったときの写真です。イスラーム諸国に留学した



資料3-4 コンテナ  
筆者撮影



資料3-5 中央アジア向けと思われる衣装  
筆者撮影



資料3-6 湾岸諸国向けと思われる衣装  
筆者撮影



資料3-7 服飾工場  
筆者撮影

人は、こういうものをよく見ますよね。アッラー、ムハンマドと書かれています、こうしたものはほぼ Made in China になります。これらを広い意味でのイスラームグッズとしてお話をしようかと思ひます。

資料3-4がコンテナです。まだ2007年ごろは鉄道で出すことができませんので、コンテナにパンパンに積んで船でイスラーム諸国に服を輸出していました。

資料3-5、資料3-6は、いろいろなイスラーム地域向けのファッションを各種取り揃えて作っている工場の中のサンプル室の様子です。資料3-5は中央アジアやそれ以外のところ向けかと推測されます。このようなものは「<sup>サンプル</sup>様品」と言って、サンプルです。そのころは、バイヤーがやってきて、「これを何ロットくれ」と注文していました。資料3-6のような黒めのものもあって、湾岸諸国向けかと思われまひます。

資料3-7は服飾工場で縫っているところでは。この会社の社長さんは河南省出身の回族、ムスリムですが、従業員は全部が全部ムスリムではないという話をしていました。その証拠に髪を隠していません。このころの義烏にはムスリムの人が多く、回族のムスリムの女性たちがたくさん出稼ぎに来てい

ました。彼女たちはムスリマなので必ず髪をヘジャブで隠していました。そうではないのは漢族です。

別の工場でも、回族の女性たちはヘジャブをかぶっていました。その会社の社長はスーダン人で、奥さんが中国人です。このスーダンの人は広州の中山大学に留学に来て、「ここはいいところなので、ここに移住することに決めた」と言っていました。「なぜ中国なんですか」と聞くと、商売がしやすいことと、もう一つは、そのころは貿易がうまくい始めたときで、「これは儲かる」ということで、スーダンと中国を取り持つ貿易会社の社長さんをやっていました。この会社には女性のアラビア語の通訳がいました。アラビア語をどこで勉強するのかは、後でお話しします。

X社では、にせブランドをイスラーム地域に輸出する商売をしていました(資料3-8)。その会社の社長は、中国共産党員でありながら、漢語で「アホン」というイスラームの宗教指導者の資格も持っているというなんとも不思議な方でした。その人が貿易会社の社長もして、つまりイスラームのことをよく知っている方が、会社の社長をしてにせブランド品をイスラーム地域に輸出していたわけでは。資料3-9~11は、2007~2010年にかけて3回



資料3-8 X社の伝票  
筆者撮影



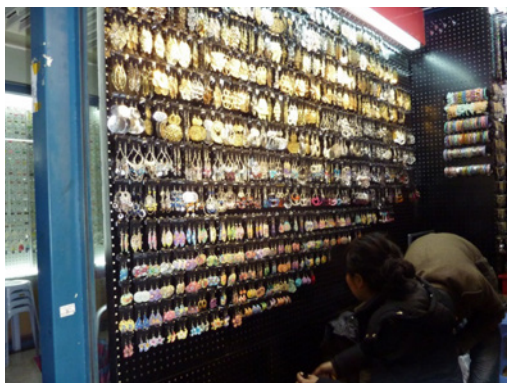
資料3-12 アラビア語の電光掲示板  
筆者撮影



資料3-9 かぎ針編みで作られたイチゴ  
筆者撮影



資料3-13 ヘジブのサンプル  
筆者撮影



資料3-10 アクセサリー  
筆者撮影



資料3-11 糸  
筆者撮影

ほど調査した時の写真で、中国義烏国際商貿城の中です。中国義烏国際商貿城は、東京ドームの85倍の広さがある、世界一の規模を誇る広大な見本市です。昨年の報道ではコロナでたいへんだという情報が見られました。かつてはたくさん人が歩いていましたが、現在はインターネット取引の発達もあって閑散としていると書かれていました。

資料3-9はかぎ針編みでイチゴを作ったものですが、卸ですのでバラ売りではなくて、1袋単位でしか売ってくれません。資料3-10はアクセサリ、資料3-11は糸、資料3-12はアラビア語が書かれている電光掲示板です。中東向けとわかるかと思います。

資料3-13はイスラーム地域向けの各種流行ヘジブです。みなさまの調査地域の流行のスタイルは、ありましたでしょうか。だいたい義烏から来ています。

資料3-14、アラブ人がお茶をするときに小さなティーカップで出てきますが、こういうものも義烏で取引されています。アラブ人が好きそうなデザインですが、アラビア語でnoticeが書いてあります。

資料3-15はイスラーム世界向けの時計です。クルアーンの章句が書いてあるなど、各種各様のものが売られています。資料3-16は電子クルアーンで、



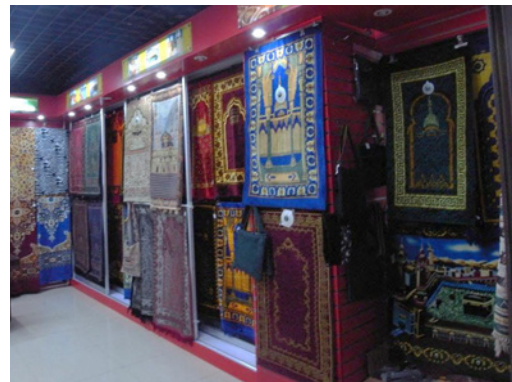
資料3-14 ティーカップ  
筆者撮影



資料3-16 電子クルアーン  
筆者撮影



資料3-15 イスラーム世界向け裝飾時計  
筆者撮影



資料3-17 礼拝用敷物展示ブース  
筆者撮影

資料3-17は礼拝用の敷物の卸屋さんです。

10年ほど前は、義烏の町中の掲示は中国語、英語、アラビア語の3か国語で書かれていました(資料3-18)。国際商貿城以外にも、お祈りのカーペットを売るところがありましたし、ハラールレストランもたくさんありました。ムスリムの男性が白いスタンドカラーの長い服を着ているのを見たら、「これはきっと義烏から来たんだ」と思っていたら、おそらく間違いありません。

## 2015年からの「宗教中国化」による イスラーム大弾圧

2015年から「宗教中国化」が始まりました。私は2015年のときにはあまり着目していませんでしたが、2017、2018年からいろいろな報道が入るようになりました。たとえば、文革で破壊された後、再建されたモスクではアラブ風のたまねぎ型のドームがかなり多かったのですが、これがテロリストの温床になる、テロリストのものだとして誤解を受けるということで、破壊されるようになりました。これも言いがかりですが、アラビア文字はテロリストの言葉と見誤るという理由で公衆の面前から削除されました。た



資料3-18 3言語で書かれた中国農業銀行の広告  
筆者撮影

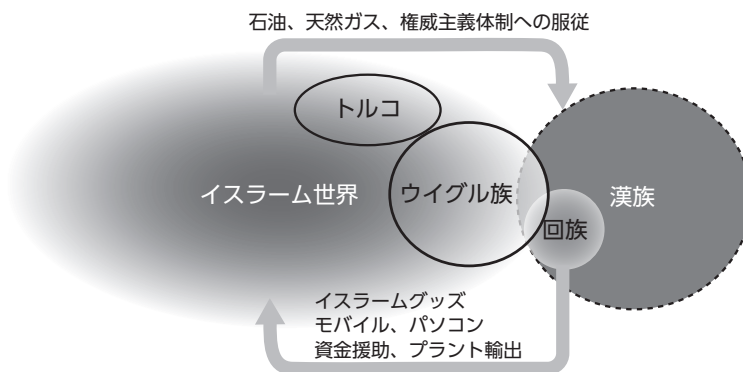
たとえば寧夏回族自治区はアラビア語の道路標識が多かったのですが、それも削除されました。「HALAL」とアラビア語で書かれていたレストランの標識も削除です。

また、モスクに子どもを入れてはいけない、子どもにアラビア語を教えるはいけない、イスラーム学校もだめ、夏休みのアラビア語学習もだめ、幼稚園もだめです。ハラール認証なんてどうでもよい、ヘジャブを着けて学校に来てはいけない、「モスクには国旗を掲揚しなさい。しないと罰するぞ」等々ということになりました。



資料3-19 中阿之軸

筆者撮影



資料3-20 イスラーム世界と中国の関係

筆者作成

また、これまでは「愛国愛教」というスローガンだったのが、特に新疆ウイグル自治区では「愛国愛党」に、つまりイスラームが消えています。私が最後に中国に行ったのが2年半ぐらい前ですが、モスクに行こうと思ったら、複数の監視カメラがあって、「部外者は入ってはいけない」と書いてありました。私たち外国人はまったく手も足も出ないことになりました。イスラーム学校には、イスラーム的な道徳を持っている、なおかつアラビア語がよくわかる、倫理的に正しい子を育成するという目的がありました。しかし、これがいまでは職業学校になってしまいました。

甘粛省の臨夏は、中国の小メッカと言われてイスラームが盛んなまちでした。そこに有名な臨夏中阿学校というアラビア語を教えるイスラーム学校があって、私は何度も行ってインタビューをしてきましたが、そうした学校はよくないという政府からの介入があって世俗化し、職業教育の学校になってしまいました。職業倫理教育であって、宗教教育ではない、民族教育かもしれないけれど宗教教育では断じてないということが、学校の案内に載るようになってしまいました。

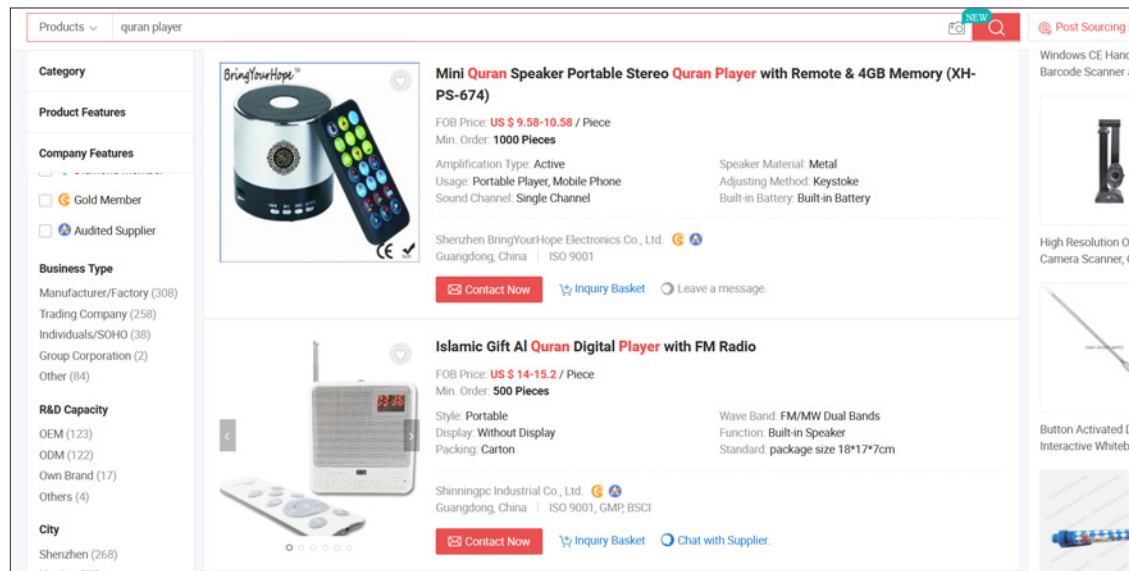
また、「中阿之軸」という美しい回廊が銀川市の真ん中であって本当にきれいだったのですが、これも壊されたそうです(資料3-19)。インターネットで見ると現在は何もなくなってしまい、「そこは中国人の祖先がもともと住んでいた場所で、中華民族の祖先である黄帝が住んでいたところだから、汚染させてはいけない」と、ヘイトに近いようなことが書かれています。

資料3-20が今日の話の構図です。右の円の範囲が中国だとすれば、イスラームグッズがイスラーム世界にどんどん行きます。中国からは資金援助があったり、プラント輸出がどんどん行ったりします。特にアフリカ諸国には、中国製の安いモバイルがどんどん行っています。逆にイスラーム世界からは、天然ガス、石油が来て、権威主義体制への服従というアメとムチでやっていることになります。

回族の人口は1,000万ぐらいですが、信仰だけで漢族と区別をされている特殊な存在です。現在は世俗化が進んでいて、豚を食べないだけという人も多くなっています。現在ウイグル問題がクローズアップされていて、彼らはこういうときにいつも苦しい立場に立ちます。ウイグル人側につくのか漢族側に



資料3-21 AliExpressで販売されているイスラームグッズ



資料3-22 クルアーンのデジタル・プレイヤー

つくなのか、それともウイグル人・回族両方弾圧されてしまうのかということが、ラティモアの1950年の *Pivot of Asia* という本にも書いてありました。かなり厳しい図式になっていると思います。

### 自動翻訳で大躍進 アリババによる輸出イスラームグッズ

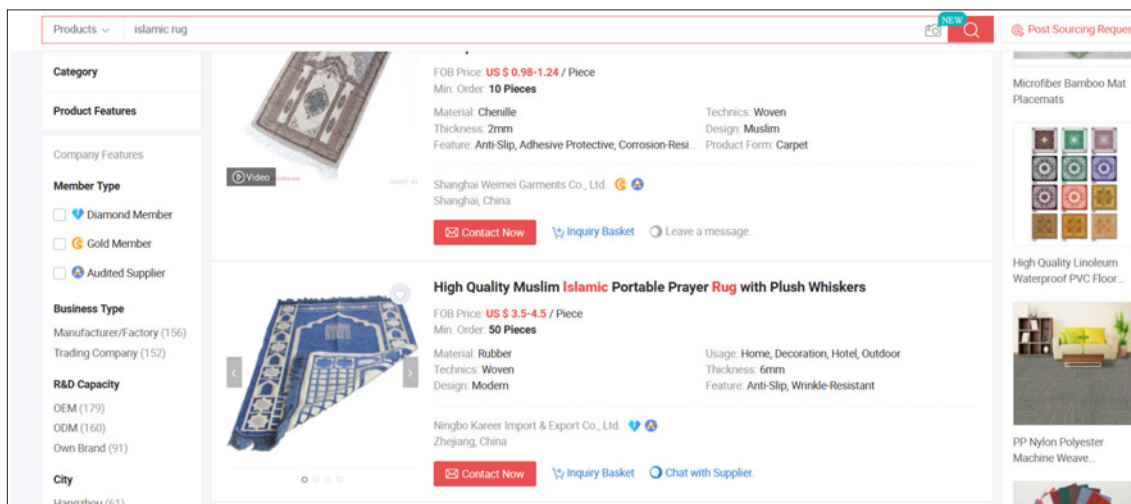
みなさんのなかでアリババで品物を買ったご経験がある方はおられますか。私はある雑誌で読んで、さっそくAliExpressのサイトを見てみました。すると出るわ、出るわ、まるで研究資料のような感じです。イスラーム地域を研究している方にとっては、おなじみのものがたくさん売っています。お祈りのときのビーズ、敷物や女性のヘジャブ、クルアーン・スピーカーや、子どものためのアラビア語学習機などもあります(資料3-21)。日本円で500円ぐらいで買えるのでかなりお安いです。こうしたイスラーム世

界向けのさまざまなものが日本語で買えます。売れ筋がよくわかるのも興味深いところです。

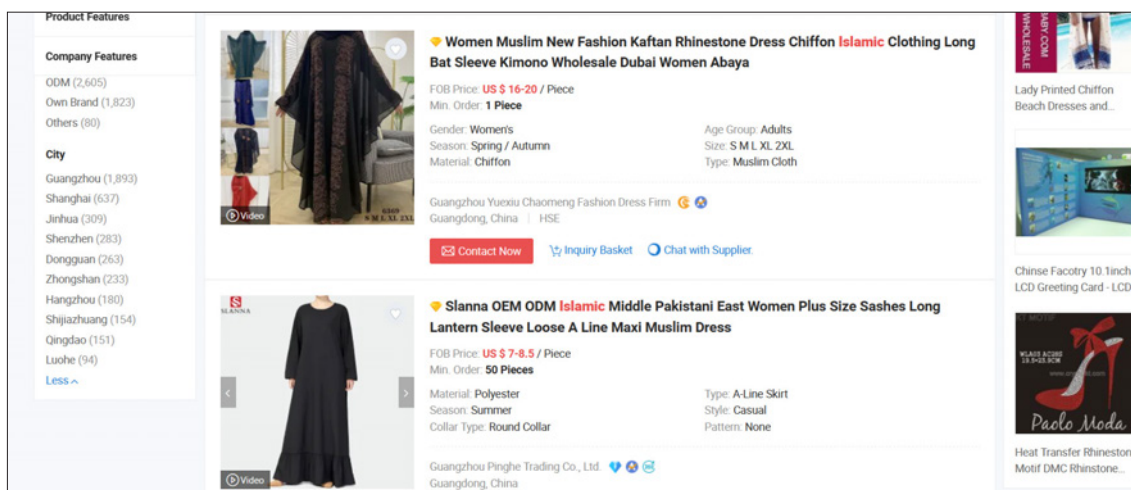
別のサイトで見ると、広州が多いですが、義烏もなかなかがんばっています。資料3-22はクルアーンのデジタル・プレイヤーです。10ドルぐらいで、「買えないことはないな」という感じです。中国国内ではどう考えても禁止されているはずですが、売る分にはまったく構わならしく、売られています。電子機器は深圳製が多いようです。

ドレスやヘジャブも売られていて、上海や広州、義烏、河南省の漯河で作られたもの多く見えます。資料3-23はカーペットですが、広州で作っているものが多いです。資料3-24の黒ずくめのムスリマ向けのシフォンのドレスが16ドル、手が届きそうなお値段です。生産地は広州、上海、義烏(金華)という順番で並んでいます。





資料3-23 Webサイト上で販売されている中国産のカーペット



資料3-24 イスラム式ドレス

## 唯物論の神はイスラムグッズを祝福し給う ——無信論と信仰グッズの矛盾をどうするのか

本日のタイトルは「唯物論の神はイスラムグッズを祝福し給う」としましたが、唯物論と宗教には絶対的に矛盾があります。文革時代は、イスラム文献はすべて禁止でした。イスラム用品ももちろんだめです。礼拝はできませんし、モスクは破壊されました。ムスリム女性は髪の毛を長くしてみつあみにして巻いていましたが、それも切られました。男性のひげも禁止されました。豚飼育を強制させられ、ひどいところでは豚肉を強制的に食べさせられました。そして資本主義の道も存在しませんでした。

それが改革開放期に一変し、イスラム復興期がありました。私が調査できていたときに彼らは『『イスラム復興』と言うな。『文化自覚』と言え』と言っていました。なぜかと言うと、世界中のイスラム復興

興と共振しているように受け止められ、それに政府が敏感に耳をそばだてるからだと言われました。

そしてモスクの再建があり、そのなかで1990年代半ばからイスラム学校が設立され、アラビア語の通訳やイスラム指導者が養成されるようになりました。女性のためのイスラム学校も1980年代半ばからではじめました。先に紹介した工場に通訳として働いていた女性たちは、こうした学校で学んでいたわけです。また、改革開放期には市場経済が導入され、文革期の「資本主義は絶対だめ」という時代とはまったく違う道を歩んできました。

では、現在はどうなのか。半分文革です。イスラム文献は隠されました。子どもはモスクに行くことはできません。イスラムの宗教指導者を愛国主義者にしなければいけないということで、そうした人々はテロリスト予備軍として監視されていると言われています。にもかかわらず、資本主義を奨励しているし、

義烏では外国人ムスリムの存在はOKです。そしてイスラームグッズを作ったり、輸出したりすることはまったく問題ありません。その仕事をしているのは回族の経営者であるケースが多い。これをどう考えたらよいでしょうか。

## 宗教なき時代、世界をさきどりする中国？

現在は、国内の宗教勢力には文革に近い対応をしつつ、国外の宗教勢力には沈黙を強要している可能性があります。その一方で、国内の無神論者には「太平の世」が来ており、物質的にも豊かになっています。国外の発展途上国に対しては対外開放して、「よき顧客」であり「よきパートナー」、「よき援助者」であるというかたちで存在しています。国外の先進国に対しては「チャイナ・フリーは考えられないだろう」ということで、経済的な相互依存関係に陥っています。服やモバイル端末など、もはや中国製なしでは生きていけない社会に私たちは生きています。

このような現実を見ると、基本的人権、自由、法治、民主など、いわゆる普遍的価値と言われるものが、新自由主義の「儲ける自由」のなかでこぼれ落ちそうになっているように見えます。「無神論の神」がチャイナグッズという形で世界に拡散している、ばらまかれてるのが現状ではないかという気がします。

斎藤幸平さんの『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020年）という本が話題ですが、この二十数年の中国における世界の工場としての変化を見てみると、まさに「人新世」のなかで、無神論者による「来世なんかはない。死んだらおしまい。ならば一回限りのこの世を楽しく生きよう」という考え方とグローバル資本主義とは、強い親和性をもって広がっていると感じます。

## ■ 質疑応答

**帯谷知可(司会)** ありがとうございます。中国の現状をふまえて、目を見開きたくなるようなわくわくするような部分と、危機感を目の前につきつけられる部分がなぜ、いかに両立しているのかにも踏み込んだご報告だったと思います。質問等ございますか。

**後藤絵美** 宗教グッズという「神様のために使うもの」というストーリーを持ったものが取引されるけれど、それを持ってくる人たちは宗教的な人たちを弾圧したりもするという構図でした。日本だとヘイトスピーチをすると不買運動が起こることがありますが、中国の製品に関してはそういうことはあまり聞かないですか。

**松本ますみ** 義烏で話を聞いたところでは、「ここに来る世界中のムスリム商人たちは、宗教はどうでもいいんだよ」ということでした。儲けたいから来ているのであって、それがたまたま義烏だというだけだと言っていましたね。私たちはすぐ「宗派は何派ですか」と聞いてしまいますが、「そんなのどうでもいいんだよ」ということです。パレスチナ人の方も来て、「お国はたいへんですね」と聞くんですが、「売れりゃあいいんだよ、売れりゃあ」という感じでした。

**香室結美** ヘレロの人たちもチャイナショップでアクセサリーを買って、それをロングドレスと組み合わせることも普通にありますが、私はナミビアのチャイナショップで、日本で見ると Made in China とは明らかに品質が違うことに、すごく驚きました。先生のご専門とは少し違うかもしれませんが、日本向け、イスラームの某国向け、アフリカの某国向けといったように、中国内で作り分けがされているのでしょうか。

**松本** されています。義烏で私が言われたのは、「おまえ、日本人かよ。日本人は検品が細かくて嫌だ」ということでした。日本の100円ショップのものも、よくできているでしょう。あれは日本向けの製品です。つまり私は彼らから、日本向けに出すと儲けが少ないから嫌だ、と言われたのです。本日の報告では触れられませんが、アフリカ向けの商品もたくさんあって、アフリカの赤ちゃん向けの安い紙おむつもたくさん売ってました。中国がすごいのは、一流品から五流品まで作れるということです。すべて使い分けができる。

たとえば、私が試しにAliExpressで買ったヘジャ

ブを見てみると、「日本では絶対に検品が通らないだろうな」というほど、粗いミシンの掛け方がされています。「安かろう悪かろう」です。

**参加者** 以前エジプトのお土産屋さんでは、「まともなものは中国製で、エジプト製は適当に作ってあるからすぐ壊れるよ」と言われていましたが、中国製品にはMade in Chinaと書いてあるので、「エジプトまで来て中国製品を買うのは……」と、お客さんがそれを棚に戻してしまうという話がありました。そこであるときからMade in Chinaとは書かずにアラビア語で「中国製」と書くようになりました。いまご紹介いただいたイスラームグッズは、Made in Chinaと書いてあるのでしょうか。

**松本** 私が買ったヘジャブにはMade in Chinaと書いてありました。先ほど紹介したX社の方が私に贈ってくれたスカーフは全部アラビア語表示のタグがついていました。おそらく私が買ったのはグローバル商品なのでMade in Chinaと書いてあるのだらうと思います。なんといってもAliExpressですので、どこに行くかわからないですから。

ちなみに、AliExpressのWebサイトを見ていると、「商品が着きました。ありがとう」というコメントが掲載されていますが、ヘジャブに関しても世界各国からコメントが来ていました。フランス、ロシア、カザフスタン、UK、アメリカ、とにかく世界中です。

**参加者** コーランにも「中国で印刷しました」と書いてあるのでしょうか。

**松本** 印刷物についてだけはないと思います。ただし、先ほど紹介したクルアーン・スピーカーは中国製です。こうしたグッズをなぜ製造できるのかというと、アラビア語がものすごく堪能な人が中国内部にいるからです。